

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(41)

奥深い山を彩っていた紅葉も、いつしか私たちのまわりにまで舞い降りてきました。紅色・黄色に染め上げられた木の葉が、吹き抜ける秋の風に揺らめいています。それはまるで錦の織物を纏いながら、艶やかな舞を舞っているかのような装いです。

奥山に

紅葉踏み分け
鳴く鹿の
声聞く時ぞ
秋は悲しき

〔古今集〕読人不知

（人里離れた深い山で、紅葉を踏み分けながら鳴いている鹿の声を聞くと、秋の悲しさがひととき身に沁みてくるよ）

「悲愁」と言われるように、秋の風情は、艶やかでありながら、同時にしみじみとした悲しみも

誘います。鹿には「紅葉鳥」という異名もありますが、錦の衣で装った牡鹿は、まだ見ぬ牡鹿を探し求めて、恋しく鳴いているのでしょいか。

色深き
袖の涙に

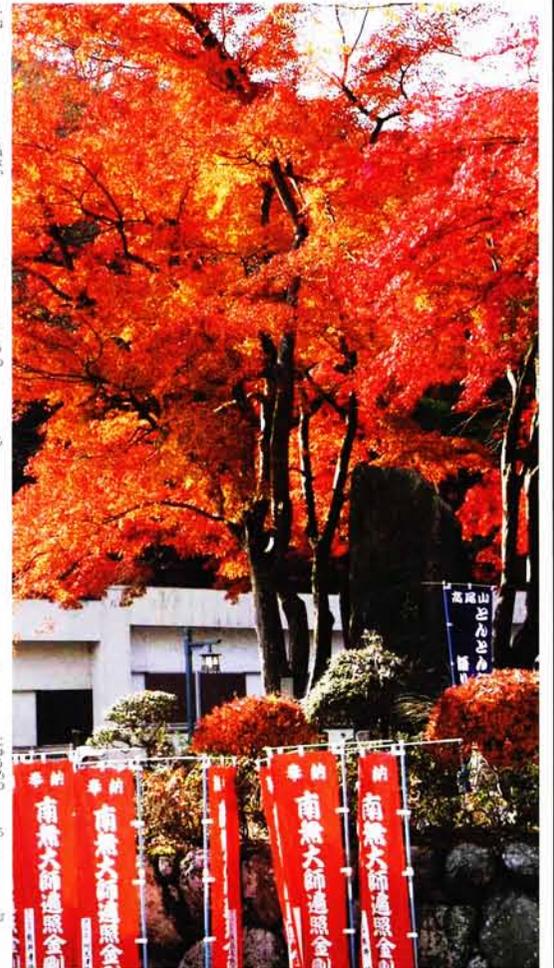
習ふらし
千入八千人

染むる紅葉

〔新拾遺集〕花園院

（ひたすら深く思い、衣の袖を濡らす涙によって身につけたのだらうか。千入・八千人に色づいた紅葉は）

「千人」とは「何回も色濃く染めること」を意味します。紅葉の色を表すときに、赤や黄色と言っただけでは、何となく薄っぺらく感じていたのは、それが何度も何度も染め浸した色彩だったからなのかもしれません。「千



霜や時雨に耐え忍び紅葉は鮮やかに色付く

入に染むる紅も染むるによりて色を増す」という言い回しがあるように、幾度も染めた真紅は、さらに染め続けることによつて、いつそう鮮やかな光沢を帯びるのです。

この歌では、色濃き紅葉は、悲しみの涙によつて染め上げられたものと詠っています。強い悲しみに流す涙を「紅の涙」と呼びますが、木々は霜や時雨に堪え忍んだからこそ、今日の前に、輝くばかりの姿を見せてくれているのでしょいか。

「紅葉」は、やがては移ろい散りゆくことから、和歌では「移る」「過ぐ」という言葉に掛けられます。盛りを誇る「千入の紅葉」も、晩秋の風に逆らうことはできません。

人も同じように、秋から冬へと歩みを進めていきます。それは日々、止まることがありません。草木がいずれば果てるように、私たちも時の流れに身を任せているのです。お釈迦様をめぐって、次のような話が伝わっています。

折り折りの記 (75)

波多野 重雄

野良着等干して勤労感謝の日

十一月二十三日を勤労を尊び、感謝する日として、国民の祝日とした。昔は新嘗祭といふ。

昭和二十三年（一九四八）に法令で改正。今年は何連の「国際土壤年」でもある。生態系や収穫する農業の土壌の劣化や開発に伴う浸食が後を絶たない。犬との登山も生態系への影響が心配。
本年は国勢調査年、世界の人口は現在七十億を超え、今世紀末百億を超えるという。日本は食糧自給率四十%台を憂ふ。
（高尾山健康登山の会々長）

早冬歩月

厚木市 荒井 一雄

黄花有佳色

漢詩人

大正天皇しのびつつ

菊花を浮かべ酒杯のみはず

臨滝聞啼鳥

黄花（菊花）、佳色（美しさ）有り、滝に臨み、

鳥の啼くのを聞く・・・

薄暮冷風光

歩月歌多少

薄暮、風光（自然の眺め・景色）に冷やかなり、歩月（月と共に歩みつつ）、多少（一休いか程の大声にて歌ひたるらん・・・）

と、お釈迦様は語りました。「私にはこのような神通力（霊妙な力）があるけれど、生死の無常（人生の儚さ）からは逃れることができない。私は明日、涅槃（釈迦の死）に入るのだ」と。

（『宝物集』）

お釈迦様でも、死を遠ざけることはできませんでした。言うまでもなく、後の世の私たちも同じです。

お釈迦様は語りました。「私にはこのような神通力（霊妙な力）があるけれど、生死の無常（人生の儚さ）からは逃れることができない。私は明日、涅槃（釈迦の死）に入るのだ」と。

御奉納御礼

篤信者の福島光子様（目黒区）より、御護摩供修行の御導師様がお座りになる、隅切回転式曲枱が御奉納されました。茲に感謝と御礼を申し上げます。

